

W. Wordsworth の「ティンタン寺院」—詩創造の原理をさぐる

野 口 忠 男

目 次

1. はじめに
2. 楽園としての自然
3. 回想による自然の賜
4. 「私」と自然の交流
5. 詩創造の原理
6. 詩の普遍性
7. おわりに

1. はじめに

Wordsworth によると『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*)は、実験のつもりで出版されたものであり、R. Rehder も「一連の生涯詩を書く実験である」"a set of experiments in writing life histories"⁽¹⁾と述べている。この詩集の末尾を飾る「ティンタン寺院」*Tintern Abbey* は、Wordsworth 個人の自然観の表明とその信念を歌った詩であることにとどまらず、詩人自身について詩を書く実験であったと言える。この実験には、詩人の詩創造の原理がワイ川の美しい自然を素材として語られているのである。

Wordsworth の詩人としての真の出発点は、都会生活及びその雑然とした状態にあつて、人は純粋な感受性を消耗し、自然の美や力を忘れ、そのために精神の不毛に苦しんでいるという確信であつた。彼の詩創造の思想的根底には、特に初期の詩においては人間性喪失からの回復が強く意識されている。これを成就させるために、詩人は自然の深いよろこびを感知し表現できる豊かな資質と自然に対する敬虔なる思いが必要となる。つまり詩人は、自然・宇宙の生命と霊的な交流を体験し、「力強い感情」"powerful feelings"や「純粋な思想」"purest thought"から成る心象を形成し、作品を想像力を働かせて作り上げていくことになる。この小論において、これらのことが語られている「ティンタン寺院」を、詩創造の視点から考察してみたい。

2. 楽園としての自然

本論に入る前に、「ティンタン寺院」の構成を考えてみると、大きく四部から成り立っている。第一部は、詩人である「私」とワイ川の自然との霊的な交流により生まれた美しい自然の形相の詩である。(11. 1~23)。第二部は、都会の暗闇や雑踏の中で、ワイ川の美しい自然を回想し、そこから与えられるよろこびの賜を表現する。(11.24~58)。第三部は、「私」と自然との交流の変遷を3期にわたってたどり、さらに詩創造について述べる。(11.59~112)。第四部は、「私」と妹 Dorothy との交流を通して、自然観

想から生まれる詩の普遍性について述べる。(11.112~160)。この詩を創造の視点から見た場合にも、Wordsworth は有機的一貫性をもたせて構成していることが理解できる。

次に「ティンタン寺院」を理解する上で、詩人の資質とよろこびが述べられている文章を見てみたい。この箇所は、詩創造の原理を考える時、ひとつの重要な鍵となるところである。

What is a Poet? To whom does he address himself? And what language is to be expected from him?— He is a man speaking to men: a man, it is true, endowed with more lively sensibility, more enthusiasm and tenderness, who has a greater knowledge of human nature, and a more comprehensive soul, than are supposed to be common among mankind; a man pleased with his own passions and volitions, and who rejoices more than other men in the spirit of life that is in him; delighting to contemplate similar volitions and passions as manifested in the goings-on of the Universe, and habitually impelled to create them where he does not find them.

Wordsworth は、詩人を人びとに語りかける人と捉え、詩人の4つの資質を挙げる。それらは(1)生き生きとした感受性 (2)熱誠とやさしさ (3)人間性についての広い知識 (4)抱擁力のある魂であり、別の言葉で言えば、(1)感覚的資質 (2)心情的資質 (3)知的資質 (4)霊的資質となるであろう。続いてよろこびの資質について4つの段階を述べている。

- (1) 自からの熱情と意欲に対するよろこび
- (2) 自からの内なる生命の靈性に対するよろこび
- (3) 自からの熱情と意欲と同じものが宇宙の運行の中にあることに気づくことのよろこび
- (4) 宇宙の運行の中に熱情と意欲を見い出せない時は、それらを自らつくり出そうとする気持ちに駆られることのよろこび

これらは別の言葉を用いて言えば、(1)動物的なよろこび (2)心霊的なよろこび (3)宇宙的なよろこび (4)創造的なよろこびとなるであろう。

「ティンタン寺院」の冒頭の自然描写には、いかに詩人の資質とよろこびが融合統一し表現されているか考えてみたい。

Wordsworth は、1793年23才の時 Salisbury Plain から Wales に徒歩旅行した折にワイ川に立ち寄ったのである。その時から5年の歳月が流れ、詩人は深い感慨を抱きながらワイ川の岸辺に立つのである。

Five years have passed; five summers, with the length
Of five long winters! and again I hear
These waters, rolling from their mountain-springs
With a sweet inland murmur.— Once again
Do I behold these steep and lofty cliffs,
Which on a wild secluded scene impress
Thoughts of more deep seclusion; and connect
The landscape with the quiet of the sky.
The day is come when I again repose

Here, under this dark sycamore, and view
 These plots of cottage-ground, these orchard-tufts,
 Which, at this season, with their unripe fruits,
 Among the woods and copses lose themselves,
 Nor, with their green and simple hue, disturb
 The wild green landscape. Once again I see
 These hedge-rows, hardly hedge-rows, little lines
 Of sportive wood run wild; these pastoral farms
 Green to the very door; and wreathes of smoke
 Sent up, in silence, from among the trees,
 With some uncertain notice, as might seem,
 Of vagrant dwellers in the houseless woods,
 Or of some hermit's cave, where by his fire
 The hermit sits alone.⁽³⁾

「私」は、想像力を働かせ、山中の泉から静かな奥地のささやきをたてて流れてくる川の音を聞いている。G. Durrant が指摘しているように、この地は「静かなエデンの園のイメージ」"an image of an Eden of peace"⁽⁴⁾で満たされている。私達は創世記のエデンの園の描写を思い起こすのである。「私」の視線は、生命を暗示する川から、険しく切り立ち高くそびえる崖へと向けられる。この崖は、人里離れた自然のままの静寂な景色に深い静寂の思いを刻みこんでいる。「私」は、都会の喧噪を逃れ、高くそびえる崖に取り囲まれている状態である。さらにそびえ立つ崖は、地上の光景を静かな空へと結びつけ、「私」の心は神聖な空へと開放されている。「私」の視線は、水平的な視界から垂直的な世界へと移行している。続いて「私」のいる場所が示される。「私」は今葉が豊かに繁っているオオカエデの木の下にいる。このオオカエデは、楽園の命の木を暗示するかのよう「私」を保護し生命を与えてくれている。

「私」は、あたりの田舎家の敷地や果樹園の茂りを見つめている。この季節には木の実は熟さず緑一色につつまれている。この青い果実をつけた木は、楽園において Eve を誘惑し最初の罪を引き起こす知識の木を連想させる。しかし甘く熟した果実とは異なり、これは悪魔の化身である蛇に Eve が誘惑される前の善悪を知らない無垢なる木を思わせる。つまり「私」は、騒然とした都会生活から清らかな無垢の楽園へ足を踏み入れ、生命みなぎる自然と交流しているのである。

再度「私」は、視線を畑の周囲に囲まれた灌木に向ける。それは勝手気ままに生い茂り、灌木とは言い難い生命の横溢ぶりである。戸口まで青々としているひなびた農場が目に入る。木々の間から音もなく煙が渦をなして立ち昇り、森に住む放浪の民か隠者がいるかのように思える。この姿が見えない隠者は、ユングの説く老賢者のイメージを彷彿させる神秘的な存在である。あるいはケルトの宗教ドルイド教の僧かも知れないし、創世記の楽園に照らし合わせて考えて見るならば、姿を隠した神の化身であるかも知れない。Wordsworth の心の奥底に存在している神聖な知恵ある者の象徴的イメージと読むことができよう。R. Noyes も述べているように、このワイ川の風景には、人間と自然と聖なる世界が互いに浸透し、力強い統一を成している。⁽⁵⁾

3. 回想による自然の賜

Wordsworth は、町や都会の喧噪の中で、フランス革命への失望、Annette Vallon との愛の挫折、William Godwin の教えへの懐疑、詩人としての将来への不安に倦み疲れていた時に、このワイ川の美しい自然"These forms of beauty"を思い浮かべていた。その時、「私」は「楽しい気分」"sensations sweet"(1.28)に浸され、それが血潮に溶け込み、五官をよるこぼせ心臓に触れて心気を清新ならしめ、さらに清浄な精神にまで浸透し、心"mind"を鎮め立ち直らせてくれたのである。ここには、Wordsworth のよるこびの第1段階から第2段階が歌われているように思える。つまり肉体や感情に即して直接的に受ける感動である。動物的なよるこびから、内なる生命の靈性に対するよるこびである心靈的な面にまで触れている。H.Read は、詩における創造的経験について述べる中で、詩人の思考に触れている。彼によると「詩人の思考はもともとは感性的なものなのである、というのは、それは肉体の知覚にその始源があるのであって、感覚器官に沿って流れ、そしてその流れに際してすら、喜びのきまった一定のパターンをかたどるものである。」と主張されている。確かに詩は、感性的で自然発生的なものであり、外部からの意志や意識に制約されるものではない。Wordsworth は、このことをよく感知し巧妙に詩の感覚的な発生を本能的に捉えている。

「私」は、解決不可能な問題に直面している時、この美しい自然の姿から別の「一層崇高な性質を帯びた賜」"another gift, Of aspect more sublime"(11.38-9)を受け、この「神聖で清められた気分」"that blessed mood"(1.38)に浸っていると、おのずと愛情が生まれ、息も血液の運行も止まり、「一個の生きた魂」"a living soul"(1.47)となる。その時この生きた魂は、調和とよるこびに静められた「心眼」"an eye"を用いて、森羅万象の中に流れている生命を洞察するのである。ここには詩人の靈性が語られ、自分の内なる生命の靈性を知るよるこびの第2段階から、万象に流れている生命を洞察する第3段階のよるこびが述べられている。

Wordsworth は、森の中をうねりながら流れるワイ川に、森羅万象の中を流れる生命の源泉を見ているように感じられる。"sylvan Wye"(1.57)の"sylvan"には"deity"の意味があり、ワイ川は神性(divine nature)を有する森の神に相当する生命体なのである。詩人の無意識の裡には、龍体でイメージされる生命の川が流れている。苦悩や絶望の暗闇に置かれた「私」が求めたのは、この楽園における生命の川であり、川が与えるよるこびの表象であったことが理解できる。「私」の語りの相手は、漠然としたワイ川の自然ではなく、「森の聖なる川」"sylvan Wye"に向って、劇的独白とも言える形式を用いてよるこびの表白がなされているように思える。またこの川は「私」の多様なイメージを写す水鏡として働いているのである。ワイ川は、こちらの世界とあちらの世界、現実界と神界の中間に位置し、両方の世界を宇宙的な空間の中に写し出すのである。私達は次章で Wordsworth のこの詩的経験のさらなる深化を知ることができる。

4. 「私」と自然の交流

Wordsworth は今ワイ川のほとりのオオカエデの木の下に、快い感覚とよるこぼしい思想を抱いて立っている。「私」は初めてこの地を訪れた時のことを回想する。その時は、ノロ鹿のように山々を飛び回り、深い川の土手を自然の導くままにまかせて走り回り、まるで恐れる物から逃れる者のようであった。「私」にとってその時の自然は、少年時代の感覚的で肉体的な楽しみとは異なり、かけがえのない絶対的な存在であった。とどろく川の奔流は、激しい感情のように「私」の脳裏から離れず、高い岩壁、山、深く暗い森の色彩や形態は、本能的なものであり、欲望、一種の感情、一種の愛のようなものであつ

た。これらのものは、思想によって与えられる高遠な魅力をまったく必要としないものであった。あの頃の「ずきずき疼くようなよろこび」"all its aching joys"(1.85) また「目がくらむような狂おしいよろこび」"all its dizzy raptures"(1.86) は今は消えうせてしまった。ここには、感覚的で本能的なよろこびの第1段階が示されている。

「私」は、疼くようなよろこびがすっかり消えうせてしまった今、自然を見る別の方法を獲得したのである。

For I have learned

To look on nature, not as in the hour
Of thoughtless youth, but hearing oftentimes
The still, sad music of humanity,
Not harsh nor grating, though of ample power
To chasten and subdue.⁽⁸⁾

「私」は、時々「人間性のかなでる静かな悲しい音楽」を聞いた。それは不快で耳ざわりなものではなく、心を清め鎮める豊かな力をもつものである。「静かな悲しい音楽」をかなでる人は、Wordsworth が田舎や都会で出会った白痴や老人や狂える母のような社会の片隅に生きる弱者たちであろうと思える。これらの虐げられた人々は、『抒情民謡集』の中で詩化され、人間としての尊厳を与えられている。Wordsworth が、これらの人たちの感情を分析したのは、「われわれの性質のうちに働く根本原則」"the primary laws of our nature"⁽⁹⁾あるいは「心の本質的感情」"our elementary feelings"⁽¹⁰⁾を理解する時、「人間の激情は自然の美しく恒久的な形象と結び付く」"the passions of men are incorporated with the beautiful and permanent forms of nature"⁽¹¹⁾ことを表現したかったからである。

And I have felt

A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,
And the round ocean, and the living air,
And the blue sky, and in the mind of man,
A motion and a spirit, that impels
All thinking things, all objects of all thought,
And rolls through all things.⁽¹²⁾

「私」は、高揚したよろこばしい思いでもって、心をゆさぶる「宇宙に存在する霊」"a presence"を感じる。これははるかに深く浸みわたる崇高な感じである。その住家は、夕陽の光、円い大海原、活ける大気、青い空、人間の心である。これは一種の運動であり、一種の霊気である。Wordsworth は同様の詩的体験を『序曲』*The Prelude* や『抒情民謡集』の"Expostulation and Reply", "The Table Turned", "Lines Written in Early Spring"中で歌っている。

I felt the sentiment of Being spread
 O'er all that moves, and all that seemeth still,
 O'er all, that, lost beyond the reach of thought
 And human knowledge, to the human eye
 Invisible, yet liveth to the heart,
 O'er all that leaps, and runs, and shouts, and sings,
 O'er beats the gladsome air, o'er all that glides
 Beneath the wave, yea, in the wave itself
 And mighty depth of waters ⁽¹³⁾ .

Love, now an universal birth,
 From heart to heart is stealing,
 From earth to man, from man to earth,
 — It is the hour of feeling ⁽¹⁴⁾ .

Wordsworth は、人間の心は自然のよろこびに触れる時、自然は宇宙の本質であるよろこびを具現したものであるため、宇宙の生命と共鳴することになると信じていた。詩人はここで第3段階のよろこびについて述べている。つまり自己の奥深くにある生命の靈性に触れ、万物の生命の根源である宇宙の本質に目ざめ、宇宙の生命を直観しているのである。その根源は『序曲』で歌われている「永劫の運動」"everlasting motion"を生み出す「宇宙の知恵であり精霊」"Wisdom and Spirit of the universe" ⁽¹⁵⁾ であり、プラトンのアイデアを想起させる永遠の实在である。

5. 詩創造の原理

Wordsworth は、目と耳で創造し知覚する世界のことを述べているがそれは一体いかなることであろうか。それは第4段階のよろこびである詩人の創造能力のことである。『抒情民謡集』の序文の中で詩の生成について次のように述べている。

I have said that poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity: the emotion is contemplated till, by a species of reaction, the tranquillity gradually disappears, and an emotion, kindred to that which was before the subject of contemplation, is gradually produced, and does itself actually exist in the mind ⁽¹⁶⁾ .

詩人は感覚と自然との相互作用から、力強い感情"powerful feelings"があふれ出ると確信している。この感情は変容し現実に心の中に存在するようになる。この時創作活動"composition"がはじまり、創作活動は続けられるのである。別の表現を探れば、

Poetry is the image of man and nature ⁽¹⁷⁾ .

He considers man and nature as essentially adopted to each other, and the mind of man as naturally the mirror of the fairest and most interesting properties of nature ⁽¹⁸⁾ .

詩は人間と自然との織り成す心象であり、人間の心は、自然の美しく興味深い性質を写し出す鏡である。詩人は彼の心中に生まれた感情や思想をより力強く言いあらわすことができる創造能力を与えられている。

『序曲』において詩人の創造能力を次のように歌っている。

…… I remember well
That in life's every-day appearances
I seem'd about this period to have sight
Of a new world, a world, too, that was fit
To be transmitted and made visible
To other eyes, as having for its base
That whence our dignity originates,
That which both gives it being and maintains
A balance, an ennobling interchange
Of action from within and from without,
The excellence, pure spirit, and best power
Both of the object seen, and eye that sees.⁽¹⁹⁾

詩人 Wordsworth において「見られる対象」"the object seen"つまり外界の自然は、「見る目」"eye that sees"つまり感覚と「相互作用」"interchange"をなし、「新しい世界」"a new world"が形成されていく。新しい世界は、想像力によって変容し作品が生み出されるのである。

Wordsworth にあつては感覚と自然の相互作用より生まれる感情や思想は、倫理的感情"moral sentiments"と結びつき、道徳的存在の中心を形成していく。

…… well pleased to recognize
In nature and the language of the sense,
The anchor of my purest thoughts, the nurse,
The guide, the guardian of my heart, and soul
Of all my moral being.⁽²⁰⁾

6. 詩の普遍性

「私」は自然との深い霊的神秘的な交流から覚醒し、かたわらにいる妹 Dorothy に向って劇的独白の方法で語りかける。「私」は、Dorothy の声や目の中に過ぎし日の自分を見い出す。つまり彼女の声や目には、幼い日の湖水地方の自然が宿されているのである。そこは詩人 Wordsworth の自然との交流の場で原風景であった。今彼は湖水地方の原風景の中で、Dorothy と一つになり深い共感を覚えている。彼女こそ「私」の自然と詩を真に理解する最高の存在であった。

「私」は、自から獲得した「楽観的な信念」を妹に伝えることを望む。

And this prayer I make,
 Knowing that Nature never did betray
 The heart that loved her; 'tis her privilege,
 Through all the years of this our life, to lead
 From joy to joy: for she can so inform
 The mind that is within us, so impress
 With quietness and beauty, and so feed
 With lofty thoughts, that neither evil tongues,
 Rash judgments, not the sneers of selfish men,
 Nor greetings where no kindness is, nor all
 The dreary intercourse of daily life,
 Shall e'er prevail against us, or disturb
 Our cheerful faith that all which we behold
 Is full of blessings.⁽²¹⁾

「私」の信念たるものは次のようなものである。自然は自然を愛したものを決して裏切ることはなく、よろこびからよろこびへと導くのが自然の特権であり、私たちの内なる心に靈感を注ぎ、静けさと美を刻み込み、心を気高い思想で養うことができる。この信念は自然のよろこびと美と力の確信だけでなく詩的創造の信念でもある。

妹 Dorothy が感覚的な存在から精神的な存在へと成長し、現実の厳しさ—孤独、恐怖、苦痛、悲嘆—に直面し悩める心を癒そうとする時、「私」の忠告を思い起こし、前向の姿勢で生きることを切望するのである。「私」の死後もこのワイ川の美しい光景を決して忘れることなく思い出し、生きる心の支柱にすることを願うのである。自然と人間性の深い理解から生まれた詩精神は、悩める人の心を救済し、正しい道を示す倫理性を有するものである。Wordsworth は、Dorothy に語りかける劇的な方法を用いながら、Dorothy だけでなく幾多の人達が、自然との共感による創造的作品を普遍的で永続性のあるものとして理解してくれることを語りたかったのであろう。

7. おわりに

私たちは、「ティンタン寺院」を Wordsworth の詩創造の原理を語る詩であると捉え、「私」と自然の交流を基軸に、「よろこび」の段階を考慮しつつ論じてきた。「私」と自然の相互交流から感情や思想が形成され、想像力の働きにより作品が創造されていく。⁽²²⁾ 詩人は「よろこび」を語る際、悲しみを意識している。つまり彼は、「よろこび」と悲しみを対峙させ、悲しみを超克してより崇高な「よろこび」へと向う弁証法的な手法を用いて作品創造を行っている。

Wordsworth は、詩創造の原理を「ティンタン寺院」において見事に詩の形式で提示し、『抒情民謡集』の序文は、その原理を理解する上で重要な指針を与えてくれるものである。私たちは、創造の原理をさぐる時、序文を参照し論を進めてきた。この詩には Wordsworth 的思考態度が表明され、Wordsworth 流の詩の世界が構築されていることに気付くのである。

この詩は、Dorothy への詩人の信念を伝えて終了するのではなく、ワイ川の水が宇宙を循環するように、最初へ戻り円環を形成する形で読まれるべき作品であろう。つまり楽園を喪失した悩める者が、再度楽園的自然へ回帰し、新たに楽園を復活するミルトンの思想が根底に流れているからである。こ

の詩は、Wordsworthの詩創造の原理が結晶化したものであり、彼の詩芸術の普遍性への希求が暗示されているのである。

(2000年度北星学園大学特別研究費による研究)

[注]

- (1) Robert Rehder, *Wordsworth and the Beginnings of Modern Poetry*, Croom Helm, 1981, p.49.
- (2) E. de Selincourt (ed.), *The Poetical Works of William Wordsworth*, Oxford Univ. Press, 1965, Vol. II, p. 393.
- (3) W. J. B. Owen (ed.), *Lyrical Ballads 1798*, Oxford University Press, 1969, pp.111-2.
- (4) G. Durrant, *William Wordsworth*, Cambridge University Press, 1969, p.35.
- (5) C.G ユング 林 道義訳『元型論』, 紀伊國屋書店, 1990年, P. 81, P. 83.
ユングは老賢者について次の様に述べている。「老人とは、混沌とした生の中に隠されている前存在的な意味を示す、優れた師匠、教師、すなわち精神の元型である。」「彼はアニマと同様に不死のデーモンであり、これはただ生きているだけという混沌とした暗闇を意味の光で照らし出す。彼は照らす者、教師にして師匠、魂の導者である。」
- (6) R. Noyes, *William Wordsworth*, Twayne Publishers, Inc., 1971, p.66.
- (7) ハーバート・リード 長谷川鑛平訳『見えざるものの形』, 法政大学出版局, 1973年, PP. 192-3.
- (8) *Lyrical Ballads*, p.114.
- (9) N. C. Smith (ed.), *Wordsworth's Literary Criticism*, Bristol Classical Press, 1980, p.14.
- (10) Ibid. P.14.
- (11) Ibid. P.14.
- (12) *Lyrical Ballads*, PP.114-5.
- (13) E. de Selincourt (ed.), *Wordsworth The Prelude The 1805 text*, Oxford Univ. Press, 1970, pp.31-2.
- (14) John O. Hayden (ed.), *William Wordsworth Selected Poems*, Penguin Books, 1994, p.21.
"To My Sister"を参照。
- (15) *Wordsworth The Prelude*, pp.12-3.
- (16) *Wordsworth's Literary Criticism*, pp.34-5.
- (17) Ibid. p.25.
- (18) Ibid. p.27.
- (19) *Wordsworth The Prelude*, p.228
- (20) *Lyrical Ballads*, p.115.
- (21) Ibid., pp.115-6.
- (22) 想像力に関して、拙論 野口忠男, 「Wordsworthの「茨」—想像力による劇化への試み」, 『北星論集』第37号, 2000年を参照のこと。